

from

いわて ファンド

株式会社 プラスプラス

すきま市場をねらった 独創的なアプリケーションを開発

インターネット上で公開されている文書や画像、動画などいわゆる Web ページを閲覧するときに利用されるアプリケーション（応用ソフト）は、ますますその機能と操作性の向上を求められている。（株）プラスプラスは、そのアプリケーション市場で独創的な製品を次々と発表、業界からも注目される伸び盛りの企業である。

IP ポータルバーで売上げ急伸

「型破りな発想で、大手が見逃しているすきま市場をねらっていく」（中野智三社長）。盛岡市仙北に本社を構えるコンピューターソフトの開発会社（株）プラスプラスは、インターネットやモバイルの Web 上で、これまでのソフトやプログラムの操作性を、よりアップさせるアプリケーションソフト（特定の用途向け応用ソフト）の開発などを行っている。製品には特許出願中のものもあり、それぞれに冒頭の中野社長の開発方針に沿った斬新なアイデアが盛り込まれている。その製品は「YOMIURI ONLINE」（読売新聞）、日経 BP などにも導入されており、同社は地方にありながら中央とも販路をもった“小粒でピリリと辛い”、存在感ある企業として注目を集めている。

同社が売上げを急伸させるきっかけとなったのは、会社成立から2年半後の2004年5月に開発した「IP ポータルバー」。これは、Web ブラウザ（Web ページを閲覧するためのアプリケーションソフト）である IE（インターネットエ



▲オフィスの全社員。働きやすい環境づくりを心配る中野社長の方針で、出社時間自由、飲食自由（費用は会社負担）。音楽も流れている、明るくおらかな職場



▲「この仕事で注意しているのは製品を出すタイミング。早すぎていけない。市場のニーズを一步先取りしたくないから」と話す中野智三社長

クスプローラ）に組み込むプッシュ型情報発信ツール。中野社長は「利用者がどこの Web サイトを見ているか常に IE のウィンドウ上であって、導入企業の新着情報やニュースのヘッドラインを表示し、おすすめサイトへのポータル（玄関口）となる」と機能を説明する。「これがあれば、企業は独自にシステムを構築する必要がなくなります。情報さえ用意すれば、簡単な操作、低コストでツールバーを構築し、運用できる」のが特徴で、企業にとっては利用者の「困り込み」に有用だと話す。県内では IBC 岩手放送が導入し、「いわてポータルバー」としてアナウンサーや番組情報、地域の生活情報などを継続的に提供している。利用者は初めに提供企業のホームページからダウンロードすれば、無料で利用することができるシステムだ。

コンピューターに関する豊富な経験

中野智三社長は久慈市出身で、1967年生まれの39歳。実家がソニーの小売店だったことから、小学校高学年のころからコンピューターにさわっていた。「ソニーの営業マンから父がもらったもので、当時はまだ電卓のような形をしていた。それを使って数字ゲームのようなものを作っていた」。コンピューターに関する知識は独学で学び、専門書を読みながら、高校時代には、家業で役立つように、ローンのシュミレーションのプログラムを作っていたという。音楽にも興味がありピアノ調律師を目指していたが、高校卒業時に難関の調律師学校の受験に失敗。「それしか考えていなかったのが、大学進学のための受験勉強などやっていた。第2の道として選んだのが、得意だったコンピューターの専門学校で、当時、日本で唯一、C言語（プログラミング言語の一つ）の講座を持っていた学校に進みました」。

専門学校卒業後は、企業のシステム開発などを請け負う東京の大手ソフト開発会社に入社。三年目に盛岡支社に転勤となり、出向先の岩手県農協情報電算センターで汎用機（大型コンピューター）のオペレーターとして勤務。この間にパソコンの将来性に着目し、同時に最も興味があったCG（コンピューターグラフィックス）をやりたいと思い、25歳



▲便利機能満載で快適なオンラインショッピング環境を提供する、ショッピングカートバー。導入されているオンライン書店ビーケーワンのサイト画面



▲IP ポータルバーで発信する情報はテキストのほか Flash ムービー表示も可能。YOMIURI ONLINE では YOL ツールバーを提供中

のときに県内のソフト開発会社に転職、テレビコマーシャルのCG制作やホームページの制作、ネットワークの構築、インターネットプロバイダー事業の立ち上げに携わった。現在のプラスプラスを創業したのは、26歳のときである。

ビジネスブログの分野に進出

社名のプラスプラスは、当時、次世代プログラミング言語といわれた「C++」に由来する。中野社長は「未来に向けて一つ一つ積み上げながら、会社を成長させていきたいとの意味を込めた」と話す。言葉どおりに社業は着実に成長、2001年に有限会社、03年に株式会社へと組織を変え、資本金も04年に2,000万円を超え、社員は現在17名となった。

開発製品には前述のIPポータルバーのほかに、オンラインショッピングの際に、画面上のカートを使って欲しい商品を簡単に購入できる「カートバー」（特許出願中。ビーケーワン社が導入済み）や、まもなく開発が終了する「Comboo」などがある。Combooは、Webページの好きな部分を切り取って、デスクトップに張り付けるソフト。閲覧、もしくは作業中の画面の好きな場所にコンパクトにしたブラウザを常時、



▲会議風景。スタッフは3人程度のチームに編成され、それぞれのテーマで開発を進めている

表出させておくことができるので、そこから継続的に最新情報を入手することができる。また、いま最も力を入れている一つは「ビジネスブログ」の分

ファンドの視点

プラスプラス社の中野社長と初めてお会いしたのは、いわてファンドが設立されて間もない頃のことでした。当時のオフィスは盛岡市内のアパートの一室、社員もまだ3人ほどの規模でした。

しかし、多くの成長企業がひしめくIT業界

で、同社はユニークなポジションを築きつつありました。岩手に拠点を置きながらも、オリジナリティあふれるアイデアと高い技術力を武器に、全国の競合他社と渡り合う同社のポテンシャルには特筆すべきものがありました。

もちろんその強みは、事業規模が大きくなった今でも変わりません。さらに拡大する事業規模にあわせて必要になる人材も、OJTを中心とする独自の育成体制を敷くことで、有能

な開発者を育ててきました。

プラスプラス社には、まだまだ世の中にインパクトを与える開発アイデアが眠っています。不利と思われがちな岩手の拠点を逆手にとって業界をリードする同社。今後さらに成長の軌道を描いていけるものと期待しています。

いわてインキュベーションファンド業務執行組合員
フューチャーベンチャーキャピタル(株)岩手事務所
熊谷 博人

岩手の人材を活用し、沿岸部にも展開

将来に向けては、沿岸の宮古や久慈など、県中部から離れたまちにサテライトオフィスの展開を考えている。地域貢献の目的もあるが、これまでの経験と実績を踏まえ、岩手の人材と技術レベルに自信を抱いているからだ。「東京はマーケティングは強いが、開発部門では人材が足りない状況。そのため中央での開発はコストがかさみ、ソフト開発に関連した人材や会社は、今後ますます地方に流れてくるはず」というのが中野社長の読みである。

優秀な人材が多い岩手で、そのポテンシャルを吸収、活用しながら岩手発の企業としてさらに発展をめざす。中野社長は「本来ならば岩手は、IT関連の学生ベンチャーが出てきてもおかしくない土地柄。まだ出てきていないのは、その先頭を切る人物がいないから。当社はベンチャー企業の一つとして、学生たちの目標となる企業を目指し、さらに頑張っていきたいですね」と力強く語った。

企業概要

設立	平成13年12月
代表者	代表取締役 中野 智三
所在地	岩手県盛岡市仙北2丁目12-39-3F
電話番号	019-656-5852
資本金	20,000千円
従業員数	17名
業務内容	インターネット、モバイル、Windows、Web2.0系、AJAXなどの各アプリケーション開発/ビジネスブログ開発など